

平成 29 年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解(心のバリアフリー)の推進事業」成果報告書

団体名

大阪府教育庁

I 概要

1 事業の概要

府立支援学校 5 校をモデル校とし、障がい者スポーツと文化・芸術を通じた交流及び共同学習を実施した。

障がい者スポーツにおいては、1 校がフロアホッケーを、1 校が陸上競技、バスケットボール、バドミントン、サッカーなどの競技スポーツを、1 校がボッチャを、また文化・芸術においては、1 校が地域の文化行事を、1 校が和太鼓を通じた交流及び共同学習を地域の小・中・高等学校と実施した。

実施にあたっては、連携校との事前打合せや、事後の振り返り等を通じて、指導目標や指導内容、評価法、教育課程上の位置づけを確認し、成果や課題の共有を行い、事前打合せシートや評価方法について検討した。

(スポーツ)

モデル校 1 校ではスペシャルオリンピックスが開発した障がい者スポーツであるフロアホッケーを通じた交流及び共同学習を実施した。交流校として小学校 2 校と高等学校 1 校を選定した。事前にモデル校教員が交流校に赴き、打合せやフロアホッケーの講習を行うとともに、交流校の生徒の実態やこれまでの取組に応じて目標設定を行った。実施後は振り返りのアンケートを行った。

1 校では、陸上競技、バスケットボール、バドミントン、サッカーなどの競技スポーツを通じた高等学校の運動部員との交流及び共同学習を各競技の練習会という形で実施した。陸上競技においては実業団選手、バスケットボールにおいては高等学校強豪校の著名な指導者、バドミントンにおいてはオリンピックを講師に招聘し、参加生徒の意欲を引き出すことができた。サッカーにおいてはモデル校が知的障がい特別支援学校のサッカー全国大会に出場した際に、大会ボランティアを務める地元高等学校サッカー部員との交流を実施した。

1 校では、重度脳性麻痺や同程度の四肢重度機能障がいのある人のために考案され、パラリンピックの正式種目でもあるボッチャを通じた交流及び共同学習を実施した。中学校 1 校、高等学校 1 校とボッチャを通じた交流及び共同学習を実施するとともに、2 月には地域の小・中学校、福祉事業所等を巻き込んだボッチャ競技交流会を開催した。

(文化・芸術)

モデル校 1 校では、地域の文化行事への参加を通じた交流及び共同学習を実施した。地域で企画・実施される行事「フェスタ・ヒューマンライツ」や近畿高等学校総合文化祭、市福祉展、地域コミュニティ文化祭への参加を通じて、地域の保育所、小・中・高等学校と年間切れめなく交流及び共同学習が実施できた。

1 校では、地域に根差す文化である和太鼓を通じた交流及び共同学習を実施した。小学部と小学校で「太鼓づくり」、中学部と中学校で「和太鼓ワークショップ」を実施するとともに、中学部・高等部の生徒が地域の和太鼓の祭典「東淀川ドコドコドン」に参加し、地域の人たちと交流した。

2 事業の成果

- ・各モデル校において、年間 3 回以上の交流及び共同学習を実施し、モデル校 5 校において、交流校 41 校と 72 回の交流及び共同学習を実施することができた。
- ・実施にあたっては、事前に綿密な打合せを行うとともに、写真入りの自己紹介カードや質問カード、ビデオレターの交換などを行い、当日に向けての相互理解を深めることができた。また支援学校の教員が交流校に出向き、事前指導を行うことで、当日のスムーズな交流につなげることができた。
- ・事業の活用により、オリンピックやプロの演奏家等の指導を受けることができたことにより、双方の学校の児童生徒の参加意欲を高めることができた。
- ・スポーツや文化・芸術を通じて、障がいのある児童生徒と障がいのない児童生徒が協力したり、競争したりする場面を設定することができ、お互い対等な立場で接することができた。
- ・府教育庁として、市町村教育委員会や関係団体と連携することで、モデル校で実施する交流及び共同学習への協力を得ることができた。
- ・「打合せシート」「評価シート」を作成することで、双方の実施校の教員の間で、目標や評価について共通理解を図ることができた。

(スポーツ)

- ・事前指導の成果により、競技やルール理解が進み、当日の交流がスムーズに行えた。
- ・支援学校高等部生徒と小学校児童の同チーム内の交流では、高等部生徒が小学校児童に積極的に声をかけ、リーダーシップを発揮する場面が見られた。
- ・支援学校では、大会等の開催も少なく、部活動等のスポーツ活動の場が限定されていたが、スポーツを通じた交流及び共同学習を実施することで活動の場が広がった。
- ・実施前は、体力差や能力差を懸念していたが、ほぼ不安材料とはならず、アンケートでは交流校の生徒から「スポーツを好きという気持ちは同じ」「(支援学校生徒の)一生懸命さについていい刺激をもらった。」などの感想が寄せられた。
- ・地域や関係機関と連携し、ボッチャ競技交流会を実施することで、学校同士だけでなく、幅広い年齢の障がいのある人と障がいのない人の交流の場とすることができた。

(文化・芸術)

- ・参加校の交流係の生徒同士が事前に打合せを行い、当日に向けた工夫を考えることで主体的な活動となった。
- ・交流に取り組んだ感想を壁新聞形式にまとめて交換することにより、振り返り指導を有効に行うことができた。
- ・ICT 機器を活用した TV 会議システムを利用した交流及び共同学習を実施することができた。
- ・和太鼓という芸術を題材とし、プロの演奏家による指導を取り入れたことで、これまで実施していたゲームなどを通じた交流と比較すると、双方の学校の児童生徒への興味関心を高めることができた。
- ・学校間で事前の打合せ事項や合理的配慮、実施後の評価や反省点をまとめる「交流ノート」を活用するとともに、学習効果を数量的に測定するために、アンケートの実施方法を検討した。また、ビデオ解析やルーブリックの手法を用いるなど評価法を工夫することができた。

3 事業の課題とその解決のために必要な取組

- ・各モデル校が3校以上の連携校と交流及び共同学習を実施し、連携先や交流機会を増やすことができたが、今後は学習の継続性を確保するため、連携先を1校に絞ることも必要である。
- ・双方の学校の児童生徒にとって負担が少なく、かつ学習効果が期待できる交流及び共同学習の時間設定について検討が必要である。
- ・双方の学校の児童生徒の意識の変化や、継続的な学習効果の測定を可能とするために、学習を継続するとともに、評価方法、効果測定の方法について検討が必要である。
- ・担当者のみの取組ではなく学校全体の取組とするための校内体制整備が必要である。

(スポーツ)

- ・競技性の高いスポーツを題材とする場合、スポーツ活動自体に意識が集中しがちで、本来の目的である交流の側面が薄れてしまいがちになるため、誰もが親しめるアダプテッドスポーツと組合せて実施するなど、内容や活動場面の工夫が必要である。
- ・それぞれの種目によって連携校を変更したため、単発的な取組となった。今後は継続的な取組が必要である。
- ・ポッチャを通じた交流では、一人の投球数が限定されてしまい、「もっと投げたかった」という物足りなさを与えてしまった。人数に応じた用具の準備や、小グループ単位での活動など、活動量を確保していくことも重要である。

(文化・芸術)

- ・テレビ会議システムの利用など、ICT機器を活用した交流及び共同学習について、更に環境整備や内容の充実が必要である。
- ・教育課程への位置づけを明確にする必要がある。
- ・共に演奏を聴いたり、演奏したりすることで、気持ちを共有することができたが、お互いの気持ちや感想などを話し合ったり、少人数で演奏の練習をするなど、交流を深めるための活動内容の工夫が必要である。
- ・文化・芸術を通じた交流及び共同学習を継続するに当たり、双方の学校の児童生徒が、どのような活動を通じて何を学ぶのかを明確にするため、目標設定や活動内容を更に検討していく必要がある。